

# イチゴの育苗期におけるウニコナゾールP処理が生育・収量に及ぼす影響

伏原 肇・柴戸靖志・林 三徳 (福岡県農業総合試験場)

Hajime FUSHIHARA, Yasushi SHIBATO and Mitsunori HAYASHI: Effects of Uniconazole-P on Growth and Yield of Forcing Strawberry

促成イチゴ栽培に要する労働期間は約1年半と長期にわたり、栽培の省力化と生産安定を図るためには管理労力をできるだけ軽減することが必要で、そのためにはわい化剤等の生育調節剤の利用も有効な手段と考えられる。今回は新しく開発されたわい化剤について、イチゴの育苗期における処理が生育や収量に及ぼす影響について検討した。

## 1. 材料及び方法

供試品種は‘とよのか’を用いた。また、わい化剤としてウニコナゾールP水和剤及び液剤を用いた。

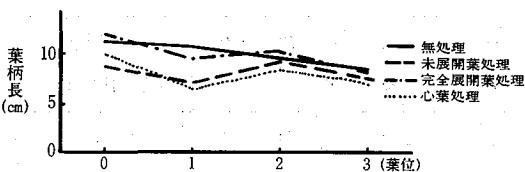
1) 処理葉位が生育に及ぼす影響を明らかにするために、処理葉は、心葉 (未出葉)、未展開葉及び完全展開葉 (新生第3葉) の3種類とした。わい化剤の処理は1989年7月13日に行い、処理濃度は20ppmとした。処理方法は未展開葉及び完全展開葉では葉面散布 (10cc/株)、心葉では点滴処理 (0.04cc/株) とした。

2) 処理したわい化剤の移行を明らかにするために、展開葉の第1葉及び第2葉の葉柄部に、処理部から処理薬液の移動がないようにウニコナゾールP 20ppm溶液1ccを含ませた脱脂綿を固定し、処理を行った。処理は1990年12月17日に行い、処理終了の'91年1月11日まで20℃の暗黒条件下においた。

3) 低温暗黒処理を利用した夏期低温処理栽培における処理期間中の徒長防止効果を明らかにするために、処理から入庫までの日数を変えて葉柄の伸長に与える影響を調べた。処理から入庫までの期間は0~7日とし、12.5℃で20日間低温暗黒処理を行った。処理はウニコナゾールP液剤12.5ppmを用い、1990年8月10日に1株当たり3cc葉面散布を行った。4) ウニコナゾールP処理が収量に及ぼす影響を明らかにするために、低温暗黒処理を利用した夏期低温処理栽培において、苗をウニコナゾールP液剤で入庫時に5ppm及び12.5ppm溶液の葉面散布処理 (10cc/株) を行った。

## 2. 結果及び考察

1) ウニコナゾールP処理葉の葉令と葉柄長の伸長



第1図 ウニコナゾールP処理葉位別の葉柄長

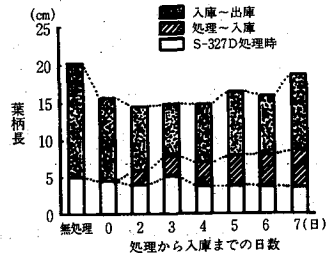
状況には大きな相違が認められ、完全展開葉に対する葉柄の伸長抑制効果は認められず、その次に出葉した葉においても伸長抑制効果は認められなかった。それに対して、出葉直後の未展開葉及び心葉処理は、処理直後に出葉した葉の葉柄長に最も顕著な伸長抑制効果が現れた。また、葉柄長に比べて葉身長や葉幅に及ぼす影響は小さかった。

2) 処理の葉位を新生第1葉の葉柄部とした場合、処理葉では明らかな葉柄の伸長抑制がみられたが、処理後、次に新しく出葉した葉の葉柄長には処理による伸長抑制は全く認められなかった。また、新生第2葉に処理した場合においても、新生第1葉への影響は全く認められなかった。葉身長及び葉幅については、処理葉やその後に出葉した葉に対する伸長抑制は全く認められなかった。

3) 低温暗黒処理前のウニコナゾールP処理は、処理時期で葉柄部の伸長抑制効果が異なる傾向が認められた。低温暗黒処理当日にウニコナゾールP処理を行った場合、他の処理時期に比べて葉柄の徒長抑制効果は小さかった。低温暗黒処理当日以外の場合では、低温暗黒処理期間中における葉柄の伸長程度に大きな差はみられなかった。また、処理5日目以降の低温暗黒処理では、処理葉の次に出葉した葉の葉柄に対する伸長抑制効果が低下したが、これは処理後の日数及び処理量の少ないことが影響したものと考えられる。

4) ウニコナゾールP処理による減収等は認められなかった。

以上のことから、イチゴに対するウニコナゾールPのわい化効果は主に葉柄部の伸長抑制によることが明らかとなった。またイチゴへ吸収されたウニコナゾールPはほとんど同一葉の上方先端部へ移行し、その伸長抑制作用は処理直後から現れるが、安定的な発現にはさらに1~2日を要するものと考えられる。夏期低温処理栽培における低温暗黒処理期間中の苗の効果的な徒長抑制には、入庫2~4日目のウニコナゾールP処理が有効である。



第2図 ウニコナゾールP処理から低温暗黒処理までの期間と処理葉の葉柄長